資料５

諸外国の温泉の活用実態について

ヨーロッパを参考にした温泉保養地の条件

① 健康的な生活をおくるうえで温泉保養地が社会的に重要な役割を認められていること

（イ）温泉療養・保養が社会保険制度上認められて本人負担が軽減されていること

（ロ）医学的に温泉医療と温泉保養地への転地保養効果が積極的に奨励されて、現地で温泉治療を受けられること

② 源泉を大切に維持管理し、源泉が枯渇しないように共同で努力していること

③ 源泉の質の低下をもたらさない至近距離に公共的な温泉療養・保養ター施設を設け、温泉保養地の中心としていること

④ 温泉保養地自体がその社会的役割を自覚し、地元自治体と協力しあって、保養客のための施設や環境を整備して計画的な街づくりをはかっていること

（イ）保養のためのゾーン（区域）と居住・店舗その他のゾーンを区分し、保養環境を維持していること

（ロ）保養のための公園（クアパーク）を中心に持っていること

（ハ）周囲に自然環境（休養ゾーン）を維持していること

⑤ 保養客の長期滞在を保障するために料金面でも配慮された宿泊施設があること。そのための宿泊インフォメーションサービスが完備しており、客はその保養地としての選択が第一て、あとは料金と施設内容に応じて、インフォメーションから宿泊先をふりわけられること

⑥ 交通ゾーンを区分して、温泉保養地の中心部においても静かさと安全に配慮していること（通りへの乗り入れ禁止をしたり、歩行者専用ゾーンを設ける）

⑦ 保養客の長期滞在を保障し、客の好みに合わせて、宿泊施設とは切り離された食事施設（レストラン）があること

⑧ 療養客以外の保養客も楽しめるように、娯楽（野外コンサートホール・イベント広場など）・スポーツ施設（屋内外の温泉プール、テニスコートなど）・ショッピング街が整えられていること

⑨ 飲泉の医学的効用が広く認められ、飲泉施設がととのえられていること

PART 2

医学的効用を再検証 見直される「温泉」活用法

ヨーロッパに「温泉」活用のノウハウを探る

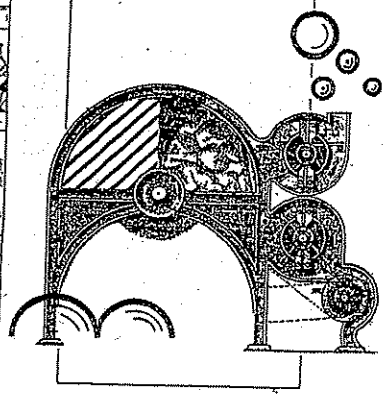
◉ヨーロッパ、二つの湯治風景

ヨーロッパをライン川とともに二分する大河ドナウ。ライン川がスイスアルプス源流より迂回しつつ西北に進路をとれば、ドナウ川はドイツ南部のシュバルツバルト（黒い森）に源を発し、さらに長く東南へ進路をとる。じつは二つの大河が〝接近遭遇〟するシュバルツバルトはドイツ有数の温泉・鉱泉地帯。両河川はまた、流域に多くの温泉を刻み、流れ行く。

「ドナウのバラ」。人はハンガリーの首都ブダペストをこう呼んだ。一世紀前にはウィーンと華を競いあった、気品ある街の美しさを讃えた言葉だが、ブダペストはまた「温泉の華咲く首都」でもある。市内に源泉は百二十八。街のあちこちに共同湯や公共温泉プールがある。

鞄を抱えた背広姿でふっと立ち寄るなど、市民は仕事の合間に温泉を楽しんでいる。ブダペスト っ子の血色がよいのはそのせいだとも。入浴スタイルの基本は日本と同じく裸。場所によってはトルコ式大浴場と個室バスがあり、それぞれ男性には男性の、女性には女性のマッサージ師を呼べたりする。共同湯の目印はトルコ風ドームと屋根上に三日月マークを付けた建物。ドーム天井の明かりとりの穴から、ほの暗い内部の浴室に、まるで星のように光が差し込むのだ。

湯治客の〝正しい〟一日の過ごし方（フランス、ヴィシー温泉の絵葉書より）



さて、ヨーロッパの湯治風景を語るのに、なぜ最初にハンガリーなのか。理由は、その歴史ゆえハンガリーにはヨーロッパの二大湯治文化が典型的に残されているから。一つはトルコ型、一つが西ヨーロッパ型だ。ユーゴ情勢に示されるように、ハンガリー人は歴史への悔恨をこめて、「二百年近いオスマントルコの支配が残したもので唯一ありがたい遺産は温泉浴場だけだ」と言う。

庶民的な湯治がこのトルコ型だとすれば、もう一つの西ヨーロッパ型は、大きく二種類の温泉活用が挙げられる。一つは健康保持・リラクセーション、もう一つは医療目的だ。たとえば、広い緑と池のある市内のセーチェニ公園には、コロセウムのようなローマ風建築のヨーロッパ最大級屋外温泉プールがある。リラクセーションしたい人は、源泉をそのまま用いた緑黄色の温泉プールに浸かり、なかにはひねもすチェスに興じるなどゆったりする。リフレッシュに体を動かしたい若者は、遊泳用プールで存分泳ぐ。ひと口に水着での温泉プールといっても、こうしてちゃんと分けられているのが西ヨーロッパ型の特徴だろう。

◉ヨーロッパ温泉地の条件とは

ハンガリーを例にとれば、毎年約二千万人訪れる外国人観光客の一五％は温泉地に向かう。その九〇％は西ヨーロッパ諸国から。来訪目的の四五％は温泉医療目的という結果が、一九八九年十月に和歌山県白浜温泉で開かれた国際「健康と温泉フォーラム」で報告されている。したがって宿泊の平均日数は十三泊。温泉病院と同じ設備を持つ温泉ホテルが多いのも、ハンガリーにかぎらず、ヨーロッパ温泉地の特徴だ。

では、新しい湯治と温泉活用をめざす私たちに参考になる、その特徴とは？

最初に結論を言えば、ヨーロッパ温泉地は、一に保養地であること。二に、だからといって閑散としているわけではないこと。日本では観光温泉地ですら、一、二日いれば飽きて、することがなくなってしまう。とにかく湯治保養客が長期滞在しても退屈しないように、街歩きにショッピング、レストラン、自然散策に、公園では無料野外コンサート、レジャー施設に劇場、カジノのあるクアハウス、アウトドアスポーツと、ハードもソフトもなんでもそろっていることだ。具体的に内容を箇条書にして挙げてみよう。

第一に、温泉地の社会的な評価はどうだろうか。

温泉保養地は、健康的な生活をおくるうえで社会的に重要な役割をはっきりと認められている。次の二点がそれ。

(1)温泉療養・保養が社会保険制度上認められて、本人負担が軽減されている。

(2)医学的に温泉医療と温泉保養地への転地保養効果が積極的に奨励されて、しかも現地できちんと温泉医療・指導が受けられる。

第二に、温泉そのものはどうか。

石油と同様、温泉を有限なものと自覚

フランス国立温泉施設（エクス・レ・バン温泉）案内より

せず、使いっ放しの日本に比べて、源泉を大切に維持管理し、源泉が涸れないように共同で努力している。そして、源泉の質が低下しないように、至近距離に公共的な温泉療養・保養センター施設を設けて、そこを温泉保養地の中心とする。

日本のように各旅館・ホテルが〝我田引湯〟、てんでばらばらに温泉を引いているのとは、残念ながらわけが違う。

第三に、受入れ温泉地側はどうか。

まず温泉保養地自体が社会的な役割を自覚し、地元自治体と協力して、湯治保養客のための施設や環境を整備して、計画的な街づくりを図っていることだ。

その特徴は以下のとおりである。

(1)湯治・保養のための区域（ゾーン）と居住・店舗その他のゾーンを区分し、保養環境を維持している。

(2)保養のために、必ず中心に公園（ドイツ語圏でいえばクアパーク）がある。

(3)周囲に休養ゾーンとして豊かな自然環境を保っている。

(4)湯治保養客が安心して長期滞在できるように、料金面で配慮された宿泊施設がある。希望料金を言えば、紹介してくれる宿泊インフォメーションも完備。

(5)宿泊施設と食事施設、温泉施設が分離独立している。だから思い思いに街で食事し、自分の宿から温泉設備のある湯元の老舗温泉ホテルか、公共施設に通う。

◉ヨーロッパ温泉ミニガイド

日本温泉協会学術部委員の山村順次千葉大学教授によれば、ヨーロッパでは主にアルプス・ヒマラヤ造山帯に沿って温泉がある。ピレネー山脈、アルプス、イタリアのアペニン山脈、トルコから旧ソ連のカフカス山脈にかけてが中心だ。

筆者は現在まで、ヨーロッパ十四カ国（火山島アイスランドやトルコを含む）の温泉を訪ねた。主な国別に見ると、どうやら温泉地数がいちばん多いのは、トルコで千以上。ただし多くは自然のまま。

ドイツ　日本の「クアハウス」の本家。旧西ドイツは百三十五、ドイツ全体で約二百二十。オーストリアを含むドイツ語圏でクアオルト（療養地）というと、温泉だけでなく海浜療養地、気候療養地まで含まれ、温泉地数を取り違える。

イタリア　約二百。日本人好みの洞窟硫黄風呂もあり。映画の舞台にもなる。

フランス　約百。唯一の「国立温泉」があるエクス・レ・バンが筆頭格。

オーストリア　五十。ウィーン郊外からアルプス近辺までまんべんなくある。

チェコとスロバキア　五十七。名湯多し。

カルロビ・バリは街に熱湯あふれる。

ルーマニア　約百六十。古代ローマ人の温泉浴場が残る。旧東欧は温泉が多い。

スイス　二十二。サン・モリッツもそう。

日本でも食事抜きOKの旅館が増えていい。また宿泊客以外温泉利用お断わりなんてことはしないでほしい。

(6)ヨーロッパの都市の旧市街にみられるように、交通ゾーンを区分、保養地の中心街を保養客がのびのびと歩けるように配慮している。路地にまで車がわが物顔で突進してはこない。

(7)温泉保養地はヨーロッパの街のなかでも滞在を楽しめる由緒ある都市。湯治でなくても旅行・出張の基地となる。

◉温泉活用のノウハウに学ぶ

大きく見ればヨーロッパでは温泉を、保健医療資源として認知。より近代医学的に温泉療法の対象とする。もう一つは予防医学的にも保養・休養目的の温泉保養地として位置づける。ストレス社会に生きる私たちに、リラクセーションによって新しい活力を得るために、長期休暇制度を活かした温泉地への転地効果を奨励しているのだ。医学的な点についてはここでは措くとして、温泉活用法には参考にしたいノウハウがいくつかある。

一つは温泉利用のスタイルが、入浴一本槍でないこと。入浴も個室バス、プール式と多様。個室バスを予約すると源泉を注いだバスタブに裸で入れる。療法士が付いて、温泉によるジェット式ヒドロ・マッサージ、部分浴、鉱泥パック等等。プールでも、水中運動指導や機能回復訓練付きの療養温泉プール、遊泳プールといろいろで、メニューも多彩だ。

グラスに注いだ温泉水で目を洗う少女（ブルガリア、ヒサリア温泉）

ぜんそくに効く吸入療法や、日本よりミネラル成分の濃い温泉を飲む飲泉療法も盛んだ。さらに面白いのは、フランスやイタリアで盛んな美容への温泉活用と禁煙療法（アンチ・タバコ）だろう。このように温泉の活用法には、まだいろいろな可能性がはらまれているのだ。

◉海外旅行・出張先から行ける温泉

ヨーロッパ旅行や出張の折りに、忙しいあなたもぜひ水着持参で温泉でリラックスしてほしい。最寄りの大都市から大体一～二時間前後で行ける近場の温泉名だけ挙げた。ホテルフロントで聞くべし。

ロンドン　ヒースロー空港から西へ二時間弱。かつてイギリス一の温泉保養地バースへ。あふれる温泉がもったいない。

パリ　パリ在住者も知らない。都心から北へ車で三十分。アンギャン・レ・バン。カジノと湖がある素敵な保養スポット。

ジュネーブ　国内のイヴェルドン・レ・バンもいいが、逆に近いのはフランス側のエビアンかエクス・レ・バン。物価も安く、ワインも美味い。

フランクフルト　北東にある心臓病の名湯バート・ナウハイムへ。日帰り客も多いドイツの有名温泉保養地の一つ。

ウィーン　オペラ座前から市電で行ける郊外のバーデン・バイ・ウィーンへ。皇帝御用達の温泉。ベートーベンやモーツァルトも住んだ。スイスのチューリッヒ近郊にも同名の温泉町バーデンがある。

ミラノ　一時間以内の近郊に四、五カ所あり。南にはテルメ・ジ・ミラドーロという温泉がある。

スペイン　意外や七十五もある。バルセロナ郊外にも熱湯あふれる温泉が一つ。